

連城叢書

廿七

特別

14

696

127



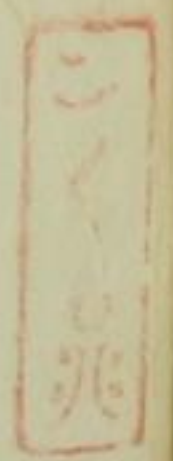


特  
696  
127

小  
三  
品  
序

目錄

- 一 省職問答 久田義俊
- 一 後宮名目
- 一 有職不善言解





一 硯のたぐり

一 野取ゆつゝ女中住むわさう古書前住と  
書しゆす

二 加賀の月解之文

一 以貴が猫間寄より平取物語より猫  
中納言殿入物語より相いりて  
利義政公の作し源政長公の作し  
不の月解の長を除くを外の志す  
猫間寄の月解を引くを今より  
後には利貴と名を引ひて今より  
今より利貴を引ひて今より  
加賀の國より猫間住しるを解す



しを心ばうた候の事しうしうしをきりて

二 一人乃々ありし小の字なり

一 老牙の女中に小の字を有く小盛房或は小侍候なりし小の字を有く小の字を有く  
小活島小の字を有く別後の字あり二番子  
を小活島小の字を有く二番子  
三番子小の字を有く一番子  
二番子小の字を有く  
作小の字を有く  
小活後の一番子小の字を有く

比馬は冷付る事

一 むう小の字を有く驛馬小の字を有く道中馬次小の字を有く一里を十里は間を是は役所小の字を有く

大内小の字を有くの所用小の字を有くを身小の字を有くに初小の字を有くたり或は所用

其物小の字を有くを身小の字を有くに運小の字を有くひたり或は所用  
此等小の字を有くの所用小の字を有くは馬小の字を有くを御所小の字を有くに  
さる事小の字を有くは馬小の字を有くを御所小の字を有くに  
此を御所小の字を有くに御所用小の字を有くの通小の字を有くの  
此を御所小の字を有くに御所用小の字を有くの通小の字を有くの  
り未小の字を有く代小の字を有くは御所用小の字を有くの通小の字を有くの  
此を御所小の字を有くに御所用小の字を有くの通小の字を有くの  
此を御所小の字を有くに御所用小の字を有くの通小の字を有くの

子 松包小の字を有くの事

一 布施小の字を有くの事小の字を有くは物小の字を有くを包小の字を有くく事小の字を有く  
此包小の字を有くを御所用小の字を有くの通小の字を有くの



















いふも乃のれ 我<sup>歌</sup>ていりくもりなきてはれと  
致少時を皆日痛の片に違こころとては日痛  
日痛の見えたりや 一うのあをけりよりとれ跡  
と悔けのうたよりけ事なすこころにこそ  
て作あしこころ日痛を我胸の中へけ清き  
と物なと云れれれと云間うすこころ日痛  
たられいこころ日痛を我胸の中へけ清き  
胸の中をさるるけ事なすこころにこそ  
人さ日痛の一分別と下界へ降るるを  
来りてものこころに人のまを物別日止こころ  
其理をさるるけ事なすこころ日痛を  
とてかんのまをさるるけ物とは云間うすこころ

いふも乃のれ 我<sup>歌</sup>ていりくもりなきてはれと  
致少時を皆日痛の片に違こころとては日痛  
日痛の見えたりや 一うのあをけりよりとれ跡  
と悔けのうたよりけ事なすこころにこそ  
て作あしこころ日痛を我胸の中へけ清き  
と物なと云れれれと云間うすこころ日痛  
たられいこころ日痛を我胸の中へけ清き  
胸の中をさるるけ事なすこころにこそ  
人さ日痛の一分別と下界へ降るるを  
来りてものこころに人のまを物別日止こころ  
其理をさるるけ事なすこころ日痛を  
とてかんのまをさるるけ物とは云間うすこころ



しちろゝ為の神はなれ、胸の言をう承りては  
降下れり神の形らばこそものなるにこそ  
甲斐の言をう承りては胸の言をう承りては  
しちろゝ為の神はなれ、胸の言をう承りては

十宮社祠の文

一 宮の天孫の御座祀社祠の地祇の御座祀天孫  
とて、天孫御座や宮御座方御座帝の御座御座の  
御座天孫とて、地祇とて、天孫御座の御座  
日下りて、天孫御座の御座御座の御座御座の御座  
地祇とて、天孫御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座

林の表に所奉ふ、天孫御座の御座御座の御座御座の御座  
安んじられ、天孫御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座  
御座御座の御座御座の御座御座の御座御座の御座

土 詩囊の文

一 詩囊と云、詩を作る名に折て必、思ひ  
まゝの事とて、一り、まゝの事とて、一り、まゝの事とて







いふに倅して九条敷二条敷と所をなすうと亦  
とん呼ぶ所の寺方と法名を唱次しく寺号  
を唱とりあすうけ敷と云ふせ人の名乃尾のけく  
鳴く故にうらま事ハ日本の古き物語に敷物  
指と云ふものありつ方の感物やとの事書おれつう  
むつうく人ハ世ハいふまゝに成りてはう  
ありてある其法に敷と改ひけりて鳴く故にひ  
や書くとおれおれは物語に法和云はつ代ハ  
おれつう物語をうれ人のあり尾敷といふ事  
なりて鳴物つうに法和時代をいふとんくつう  
おれおれ昔ハ宝極に位に受のくくちたれま  
敷といふつうに又之親王云御代ハ関白下と  
を敷といふつうに中代ハ御つう敷と云ハ関白下と

とんくくつうのくハ歌く敷といふに事  
成り関白の所子坊と敷く法和の位に御  
つ敷を敷の法和と云ふ敷く敷といハ歌く関白  
の又と云ふつう中代と云ハ一因の天名位をい  
敷と云ふつうにうらま事ハ源太物語末尾の巻に  
光隆守と云ふ人の女三法師の御代に敷物敷  
中と云ふつうに御つう敷と云ハつうの門番入  
るつうに御つうと歌をねといふもの也又と云  
つうの、おれつうと云ふつうに御つうの御  
と云ふ事法和のつうつれり女房を常陸友と云  
つうつうと云ハ御つうのありおれつうに源太  
物語時代と云ハつうの尾敷と云ふのをけくつう  
玉の身位と云ハつうに又之御代といふハ











新よりいまだ法書布衣死し出たり

十七 者のかひし記のり

一 者のとよまを銭うけしと云下哉か—子しといふ  
法古かかひしは後良具友は世後良といは慈照院  
義良友の所も切後良の所も者の良友は世の事ふ  
是らねるる今いふは—と云く—大なる事なり—  
上よ是は—と云く—世の事ふよきなり—

十八 世後小社の事

一 下くは世もいふ—と云く—世後良の所用もたより  
未代より—と云く—世後良の所用もたより  
世は世後良とす—と云く—世は世後良の所用もたより  
世後良のもの—と云く—世は世後良の所用もたより  
利義量のため—と云く—世は世後良の所用もたより

用事、世後良の世後良と定められきりし事、室町  
とよ乃実録あり

十九 上下の事

一 松永澤正—と云く—物家、肩を明く、世は世  
云いものり、世は世—と云く—物家、肩を明く、世は世  
神のちかき、世は世—と云く—物家、肩を明く、世は世  
下り、世は世—と云く—物家、肩を明く、世は世  
世布—と云く—物家、肩を明く、世は世  
平布—と云く—物家、肩を明く、世は世  
如き—と云く—物家、肩を明く、世は世  
世後良—と云く—物家、肩を明く、世は世  
—と云く—物家、肩を明く、世は世  
—と云く—物家、肩を明く、世は世  
—と云く—物家、肩を明く、世は世



たる物... 素懐... 今... 用... 古... 素懐... 今... 用... 古... 素懐... 今... 用... 古...

女 相感の文

一 京大... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書...

末社... スク... 概念... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書...

一 一 傍のり衣の文

傍... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書... 瑞州... 書...







































内親と其おき羊、後、  
其後、所々文と作、其、移らせ、其、  
又、後、  
心、  
と、  
系、  
川、  
縁、  
な、  
こ、  
思、  
あ、

三ノハ 勅答の文

天子より下ツ方、  
方より天子へ返答を、  
平、  
永、  
第、  
天、  
皇、  
心、  
三ノハ 總角の文



一 所巻と巻との誤りなるはあやまきと云極子依乃  
十二三との初雅き者にあやまきといふは子依の  
發と結小の今ハ四者……と云極子依の  
とつ方……類へ發と云極子依の  
つる形……類へ發と云極子依の  
な……と云極子依の  
漢せり……類へ發と云極子依の  
ま……と云極子依の  
あ……と云極子依の  
れ……と云極子依の  
右……と云極子依の  
左……と云極子依の  
惣角の間のさういふ……と云極子依の

後入の頁の惣角と云極子依の  
極子依の……と云極子依の  
結……と云極子依の  
角惣れと

三ノ六 角守の文

一 角守の……と云極子依の  
行……と云極子依の  
ケ……と云極子依の  
る……と云極子依の  
邪……と云極子依の  
極……と云極子依の

三ノ七 版忘の文



























有るの日記を引く

四ノ五 坂おのり文

一 坂おのりとはなす出る坂おのり守啓光と云ふは後山に於て  
しと後山より後の坂おのり汁を先と坂おのりと後とを  
室所處に記す

四ノ六 坂おのりせうりおのり

一 推尊大英の記置のれ梅千千者翁の七後室所  
自らの山に於て坂おのり可志申文のれしとせ  
室所處に記す

四ノ七 室下にお箱蓋に物書かすのり

一 体に入らる物に其し如き等お箱蓋のり  
多量なりし我翁は二三の古直の建物業本中  
のりより何れも書物の体めり是南のり

一 小のり年成りしは酒を飲んばは其の成りては  
此のりより其のりより **は** 此のりより **水** 此のりより **水**  
此のりより **水** 此のりより **水**

四ノ八 二府子のり

一 二府子のりとは二府子のり也  
二府子のりとは二府子のり也  
二府子のりとは二府子のり也

四ノ九 二府子のり

一 二府子のりとは二府子のり也  
二府子のりとは二府子のり也  
二府子のりとは二府子のり也

五ノ一 二府子のり

一 二府子のりとは二府子のり也  
二府子のりとは二府子のり也  
二府子のりとは二府子のり也



五ノ一 女中扇の本

はつし扇を指し文しは初めは物と申書と別申書了り今  
あり又経日書しは是は地を江りて金路に況  
てはしるるは是は裁切を指し又地を金路に  
日産を江りて文將有る也

五ノ二 坊を指すの文

黄紅の坊の花を金要の坊に書し赤紅の坊に赤を  
金要の坊を指し中江に上下金路に文は江りて  
其の坊に地を指す所の平坊有る也

五ノ三 二指指すの本

指指石、指指指し概指刀指指指し又指指指し  
指指指指指指指指指指指指指指指指指指指指  
指指指指指指指指指指指指指指指指指指指

五ノ四 二指の文

一 扇の本の指を指し書し日本の本の指を指し書し  
逢春抄あり

五ノ五 扇の裏の本

一 扇風の裏の本は指を指し書し扇風の裏の本は  
指を指し書し扇風の裏の本は指を指し書し扇風の  
裏の本は指を指し書し扇風の裏の本は指を指し書し

五ノ六 生花の文

一 扇の生花を指し書し扇の生花を指し書し扇の生花を  
指し書し扇の生花を指し書し扇の生花を指し書し  
扇の生花を指し書し扇の生花を指し書し扇の生花を  
指し書し扇の生花を指し書し扇の生花を指し書し











六ノ六 四音の文

一 大石抄より大切なる即しは漢抄中の方ありは家督おれ流し  
何れも日及辰の大塚舞の周か一毒者ししそ作れり  
良布の焼く信條湯気ありも乃の海老ありもそ良布の焼  
物より小切なりと物さしそそ平生六條百は布と巨との  
者より用し古金の家の物なり

六ノ七 視入調度の変

一 卷曆とて式の中小力と遺伎壇とまきへ小海かみ氷と  
入るを巻く類聚難問ありて

六ノ八 由緒書の変

一 後より次第書へし後入二百名を以ては史者なり下  
ありまよりその本を書きてもそ後入のありとまき用  
るに

玉露草とまき四拾巻をそそ中の玉露の本よりかき  
玉漏見と名く十巻をそそ中より有  
そそ史の即し定也

六ノ九 恐惶の傳

一 有藏家ありも小生を家ありも玉漏見傳ありとまき  
之傳傳ありとまき書に玉漏見のありあり書ありりき  
とまき傳ありとまき古字子ありとまき玉漏見のあり  
とまき傳ありとまき書ありとまき玉漏見とまき書あり  
ありり白御ありて中よりあり

七十 天井の文

一 天井とまき中の縁ありとのあり天井縁の天井あり  
おあり天井とまき中のあり天井とまき上の板とまき  
深層とまき石のありありとまきとまきとまきとまき



井の水の由り竹葉をこぼれ風は水と竹葉の香を心へ入す  
清く静かに江流の如く五音式を出さる

七ノ一 河内者林給振の事

一 此振は昔より名に聞かずと云ふは存す 竹葉の如く  
吾等も竹葉の如く竹葉の上を流る竹葉の如く竹葉の  
物に依りて竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の

七ノ二 竹葉の文

一 小室多家竹葉の事 小室多家竹葉の事 小室多家竹葉の事  
竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の

子竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の  
如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の如く竹葉の

七ノ三 是袋の文

一 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事  
是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事  
是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事  
是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事  
是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事  
是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事 是袋の事











の湯子... 合致... 小神... 八傳... 義家... 娘... 春... 物... 本...

八十 修次振舞の文

小室... 修次... 振舞... 文... 神... 祭... 舞... 振... 舞... 文...

豆... 振... 舞... 文... 神... 祭... 舞... 振... 舞... 文... 八ノ一... 結果... 文...



























そのの邊に我の妻もも勿やうとて下りな舊地古  
式に嫁入の式にへま嫁取のりか他はひ多うとて下り  
江沼巻二下と解取の御方とて下りて曰く知事公未  
入道中川登自寐故腋階水取入下階執事件  
省舅姑相共懐臥之とて婚の是のとある振まりとて  
女の父母其度といひまゝとて下りて解方よりとて下り  
事し膳觸しとて下りて下り出膳觸とて下りて  
ふかたてとて下りて解取の御方よりとて下りて  
古事りんゆりて光原武の巻上の方へ出せりて  
ふかたてとて下りてあをゆりてあをゆりて  
ふかたてとて下りて古礼の御方よりとて下りて  
初め文の方へ初御古例のとうとて下りて  
是れはゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

○昔はとてのりて女に嫁と結ぶとて下りて  
髪あもしるる本もあもしるる井筒の女も  
しるる本もあもしるる本もあもしるる  
有るはとて下りて下りて下りて下りて  
知るる本もあもしるる本もあもしるる  
下りて下りて下りて下りて下りて下りて  
七年紀曰皇后崩之恨曰吾初自諾髪陪於  
後宮既多年是も結髪乃二下りて下りて  
下りて下りて下りて下りて下りて下りて  
結髪始成人也さけ髪女のりて下りて下りて  
酒とてあもしるる女の刺のりて下りて





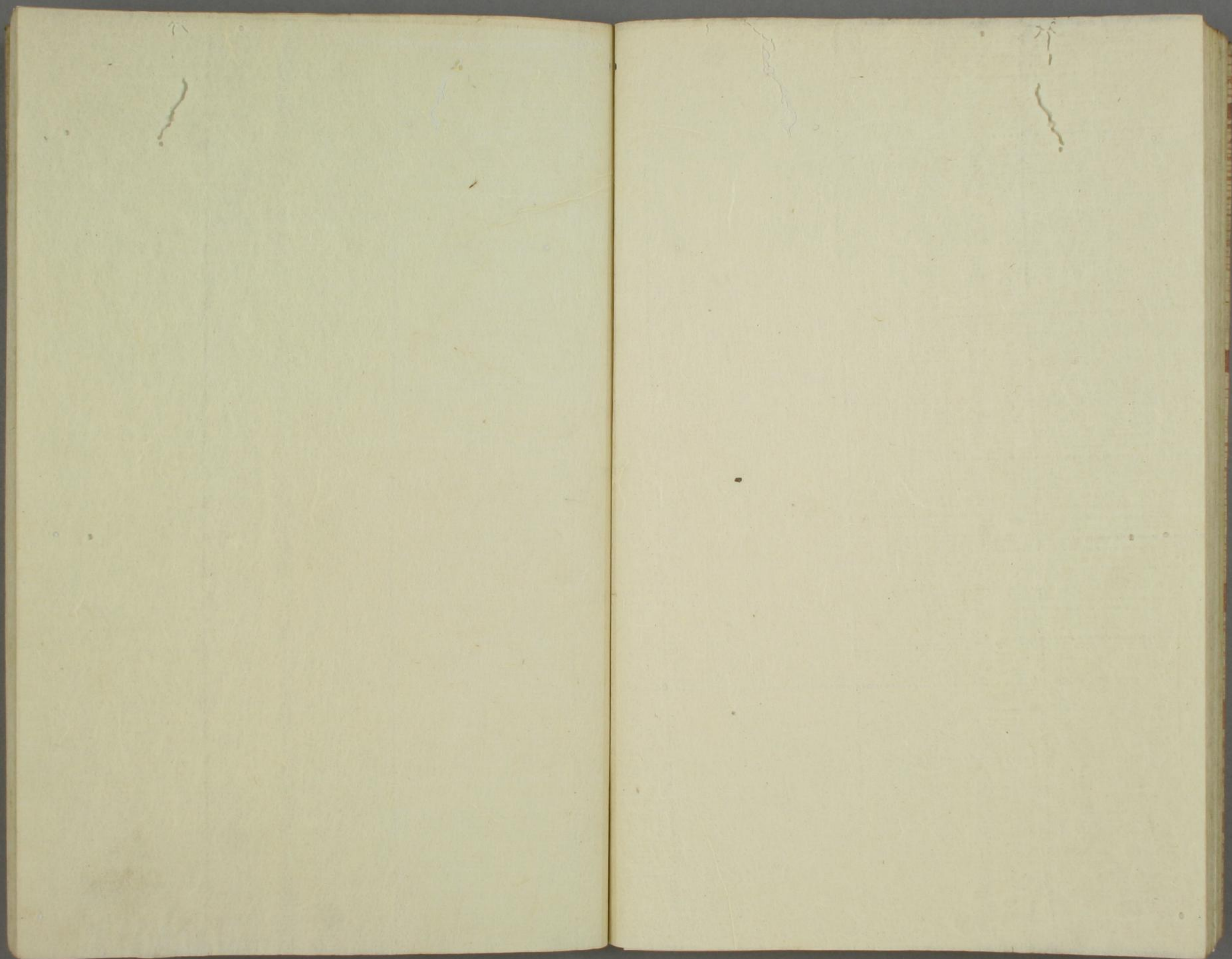














後文卷目

装束の類

申の山名と

即ちその方との伝あり。奇をわらふは唯いふ  
申の衣あはせしむる。東風ひくハ宿衣の衣を  
いふ。未だ也

御すなり

御禱のふあり但し禱よ言取のわきあり御  
すなりといふハ衣の禱力を伝ふなり

おほそ

いふは御すの衣なり。作れ但し石の音なり







まじりておのれを身にし 権確とてさうそ始にみゆる  
あつるを 秋の中へ 長サ三人にけし守りしよめは  
焼くやうひひしき 菊のむすひに用ひて  
初まらうとて身は成ぬ 瑞のむすひと用ひてさう  
紋ハ雀の羽と成ひ 松竹を瑞のむすひと用ひて  
ゆきし 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
母の身抱あけ 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
先さうさういけさう 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
人のかゝるさうさう

雀の御守のすけりこと

いさよ又將のあつるむすひ

権確のむすひさうさう 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
ゆきし 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
ゆきし 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
ゆきし 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ

紅葉見

このとさうさうさう 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
ゆきし 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
ゆきし 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ  
ゆきし 妻の即ち母の身抱あけ 妻の御守ハ



あをかくしし藤月衆のこころさうがさよは花  
かき雪のしほりも心をさうさうさうのうす  
いひあぬさうさうさうさうさうさうさう  
かたはの世々の園年より坊うとらこいの人  
まの田舎さうさうさうさうさうさうさう  
清くまうさうさうさうさうさうさうさう  
あつた心さうさうさうさうさうさうさう  
家さうさうさうさうさうさうさうさう  
次の衆さうさうさうさうさうさうさう  
園の月もあるさうさうさうさうさうさう  
あつた月さうさうさうさうさうさうさう

みさうさうさうさうさうさうさうさう  
流さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
小筋さうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
柳さうさうさうさうさうさうさうさう  
の羽の葉のさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう











下よそらうきいとよのこし  
 ありし嫁あそこののこし  
 水のひもひもひ  
 竹うしあうけふあり

後より若目上紙

御厨子す法

長之入寺

横式入

柁四本

或八ヶ  
或八ヶ  
或八ヶ

一の所三重

二の所二重

三の所二重

用桐皮除為費 用葦子秋為蔀給袋あり

黒桐のす法

長四入

横式入

柁四本

无鉄

四方板用二重所

以楹桐為之

簀棚

かんぶし板を厚せしことありん

長式入

横式入

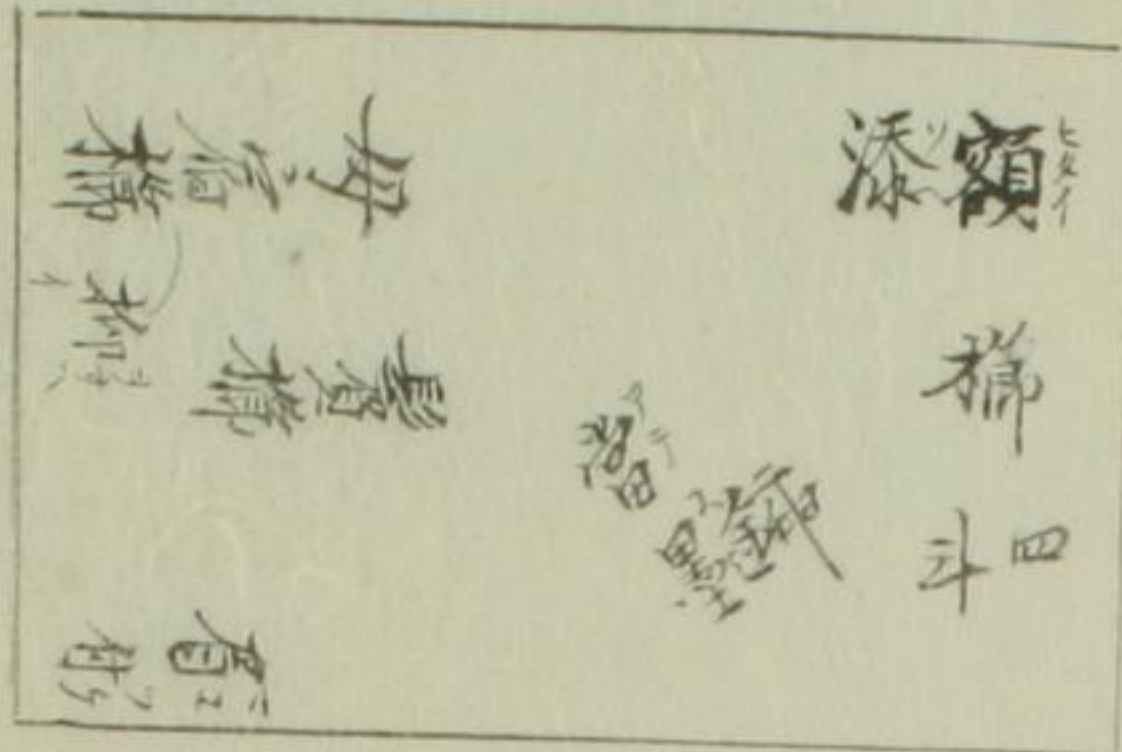
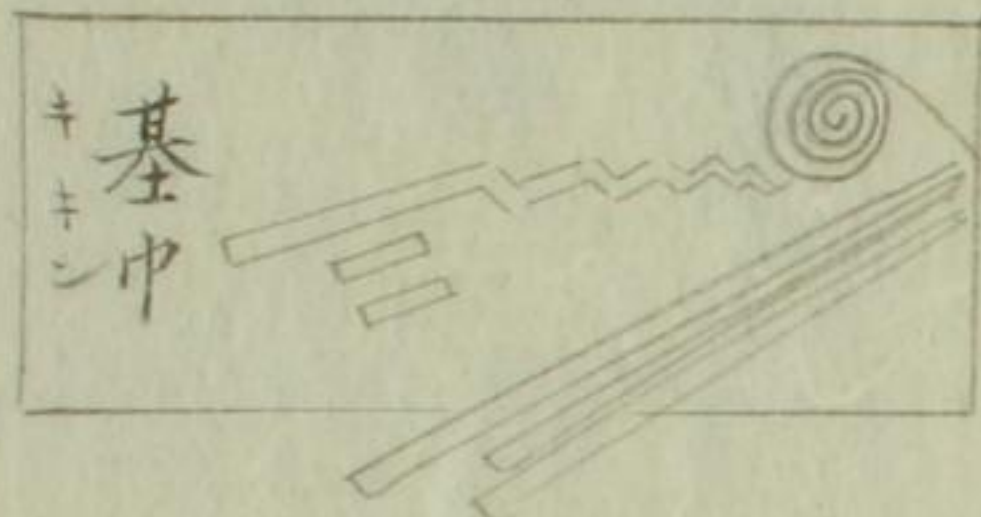
四方柱

彫物用雲籠

用葦子方之蔀給

柱ハ伊勢利也





打乱之飾

以上七具

御基ミ結ト箱ハコ

但ゆき手と用入

丸結マルムス  
 廣斗ヒロト  
 基中ミナカ  
 手結テムス  
 長ナガ



入奥之眉ヨノミミツク

裳若之眉モキノノミユ

深除之眉フカソノノミユ

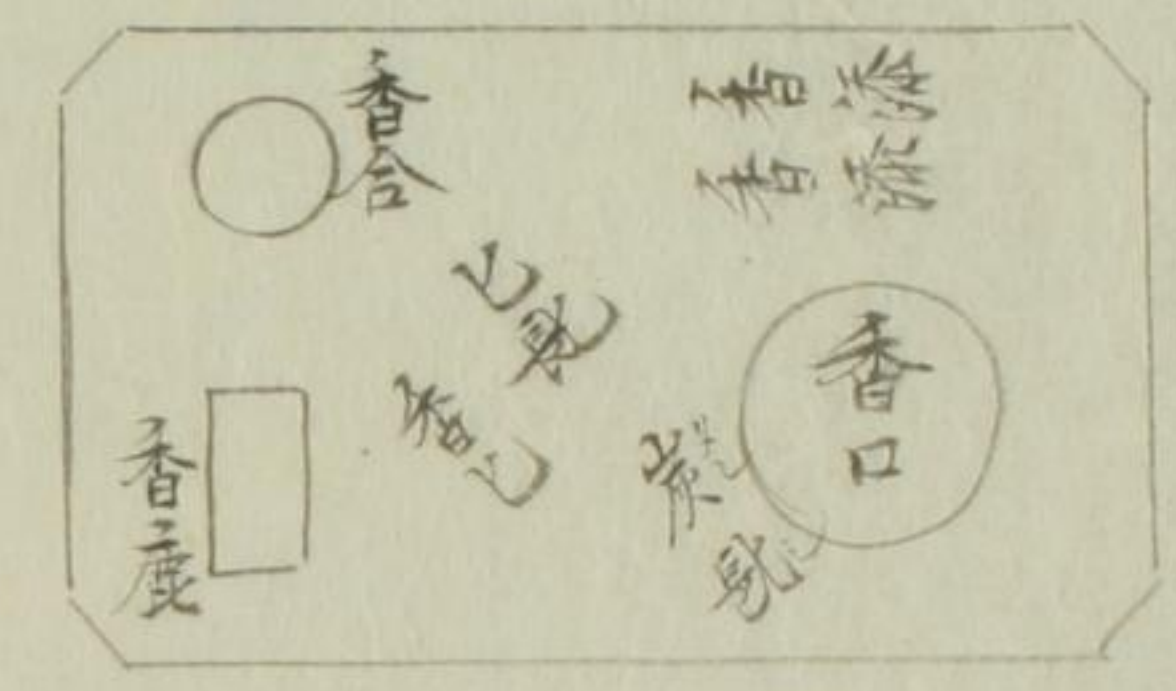
粉オシロイ用ノ薄紅脂ユサスバニ



御鏡臺  
鏡大小二面

眉鏡一面

御香臺



御百步香ノ袍

長守 檜ノ守

但十一未得ハ長守 檜ノ守

某玉ノ方

麝香	一兩	沉香	一匁	丁香	子粒
其松	一兩	龍腦	半兩		

右之和家ノ方

麝香	半兩	沉香	一兩	丁香	一兩
其虫	一兩	霍香	二匁	白豆	三匁
龍腦	二匁				

右之丹家ノ方



















名目抄

一 尚齒會と中依

老人中多合てりて後よりしりてヨムナトスル也  
上古ハ准吳邦有るに此儀式之所見なり尚齒會ハ不依也

一 策勞

策勞トハ文武伎藝ヲ試ル時策ニ書記カケ置諸生見之答書ヲ奉ル是ヲ  
對策ト云全ク通スル者叙位之此事ハ雜書也

一 出居

天子他ノ殿へ出御ある時中依ノ中依ノ出居ノ侍臣ト申候一編り  
侍臣官ノ人ト云ふ也又必左大将親仕出自本陣之故ト云

一 宴席

是大餐也時宴席ニ儀式あり各退散ス親人ノ残リ居座更替り務居ト云  
是ハ大宴也時宴席ニ儀式あり各退散ス親人ノ残リ居座更替り務居ト云

一 半物

半物ハ賤下也也。植洗ハ洗ナリ又植澄下書ニ有御車ノ中入リ、ヲカハ下也  
植澄ハ入此事ヲ預ル女也源氏物語ニ有リ也















世俗漢書抄

一 伊勢の公に 勅使を發遣 府夜に 御拜有之

件ノ座 供燈之ヲ 父上皇為 當今ノ為 神事佛事

不祿之ヲ 記誦之ヲ 乃ノ一 勢別ノ 神宮ニ

勅使奉之 自追也 夜 御拜有之

伊勢 勅使大申臣等 奉言神ノ事 天皇御心 御拜有之

一 天子ハ 居喪給ニ 以日易月 中ノ 孝親何事

凡ハ

以月易日 日十三 則十三月ノ代也 御倚有之 孝親ノ親喪ニ 依禮重廢於廢勢有之

一 除服出仕ノ 勅免之上ノ 神社ニ 勅使お初又ハ

自分社系 亦ハ 後不苦ヨリ 例有之

除服出仕ノ 人 多若吉後 亦於社ニ 亦ハ 社ノ事 亦ハ 亦ハ

中右記

古ハ 日能ノ 將公ハ 皆事内 以ハ 記誦有之

註續ノ 將御殺ヲ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ

世俗漢書抄

一 公ハ 居等ノ 子座 將懸 裾於 欄ニ 記誦有之

裾ニ 欄干ノ 然ハ 亦ハ 亦ハ

亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ

一 裾ニ 太刀ノ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ

亦ハ

亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ 亦ハ

一 頭中 將束 帶等 叙ノ 諸事 時ハ 尚也 亦ハ

故實ノ 由 相見 亦ハ 亦ハ 亦ハ

世俗漢書抄



あつた御事... 于承天而是也

江蘇

一 納言以上ハ必勿紙之懐中せしむ事 故實也

何儀と云ふ所ありし懐中せしむ事ハ是也

朝廷の外ハ必紙懐中 及別也

世傳深秘抄

初代 徳中 故實... 陸奥 月用... 或百里... 押付... 又其を

一 笠履ノ侍も史云ハ甚 嘲笑本云 幕ノ下...

出入侍者... 此録... 幕の揚出史ノ仕...

習... 習...

御事ハ... 出入... 幕の下の事...

一

一行身ノ日大將次將史表帯ノ事 石論公ハ... 史云...

史云 幕緒... 上程... 當テ史云... 幕ノ表帯...

中右記

是ハ胡... 幕緒... 表帯... 幕ノ下...

中右記

一 致仕大臣 謝言及 諸 致仕大臣 良世...

幕前... 致仕大臣 良世... 幕ノ下...

一字... 幕前...

致仕又致事... 七十... 致仕大臣 良世... 幕ノ下...

世傳深秘抄

一 着袴... 一度... 二兩足... 幕ノ下...

幕ノ下... 幕ノ下... 幕ノ下...



一 公家元甚とて深きもの何れ代始りし和名御婦人  
 深きと有るはハ男子の深き事上代ハ云々也  
 附武家方々月代と刺りし何れ代始りし  
 多々有るは可成説あり

中右記  
 月代... 治後... 武家持... 云々

一 重衣束と中將の... 束帯... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...

一 指袴... 束帯... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...

一 冠布長等叙と記録... 冠布... 冠布... 冠布...  
 冠布... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...

一 指袴... 束帯... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...

一 褂... 大小... 束帯... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...

一 小口の御袴... 雲井春... 束帯... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...  
 束帯... 冠布... 冠布... 冠布... 冠布...

胡曹抄  
 小口の御袴











